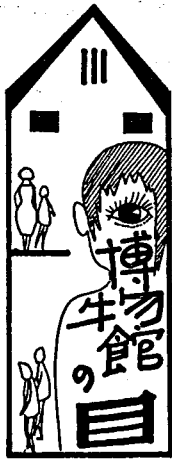


岐阜の博物館

〒483 羽島郡川島町
 エーザイ工園
 編集 内藤記念くすり博物館 内
 兼 岐阜県博物館協会
 発行 TEL (058689) 3111
 内線 540
 振替 名古屋 70106



明方村博物館として知られてきたものが、廃校となった小学校を大改造して新装オープンし、独立した建物として発足すると同時に、表向き名称を明方村歴史民俗資料館と改称したようです。聞くとよければ、国の補助金を得ての改造で、博物館ではなく資料館の名称でなければ国庫補助が得られなかったとのこと、名称などの是非よりも現実の館の活動そのものこそが重要なことは当然としても、何か釈然としないものを感じる。

地域住民にとっては、屁理屈を云わせてもらえば、資料館よりも博物館であってくださることの方が幸せであるからである。そもそも資料館とは、文化財の大切さからそれを保存することが第一の目的で、資料を収集し、保管設備をととのえ保存管理し、これを求めに応じて資料提供するのが建前である。そのために、ややもす



資料館と博物館

ると、博物館としての機能面はやゝ忘れられ形式的な収蔵施設に終始しがちで、研究者のためには役立つ資料館であっても、「一般大衆への積極的な働きかけに欠ける」という状態になりやすい危険性をふくんでいる。

これに対して、博物館は、資料の保存を目的としつつも、「もの」を通して教育的活動を行うところに博物館たる存在基盤があり、みんなのための文化センターたる責務がある。

現実には、資料館であっても、積極的に地域住民に働きかけを行ない、博物館として恥じない十分な教育活動を推進している館はいくつもある。逆に博物館の名まえは有していても、「もの」を集めることもなく、また積極的な教育活動の実践もなく、博物館顔をしている館もある。博物館以上の資料館があるかと思えば、形式的な「もの」の収蔵施設たること

もできない資料館以下の博物館も存在するのである。

このことは、予算措置の裏付けの有無というよりは、やはりそこにいる人の問題であるし、館を支える人々の自覚と実践力の問題であろう。表向き名称が「資料館」であろうと「博物館」であろうと、文化財は、研究者のものでも所有者だけのものでもなく、みんなの共有財産であるかぎり、その「もの」をみんなのものにすることこそ、資料館・博物館の共通した使命である。しかし、名は体を表わすといえますから、明方村歴史民俗資料館は、やはり明方村博物館であって欲しいのですが……………さて貴女のご意見は？ (K.H)

熊谷守一記念館

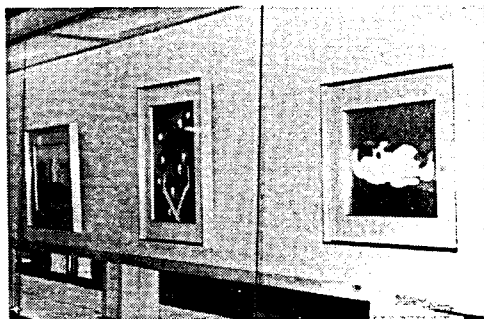
▽ 508-08 恵那郡付知町辻堂

TEL 057382-2252

単純美に深い味わいの熊谷芸術

今は故人となられた洋画界の巨匠熊谷守一画伯は、明治18年(1880年)に、恵那郡付知町で生まれられました。このことを誇りに思われていた付知土建株式会社取締役社長 三尾隆夫氏は、“折にふれかいて頂いた絵や書が50点余にもなりました。これらの作品を私一人が私蔵するのは、余りにも勿体なく先生生誕の地に記念館を設立し公開することにし、熊谷芸術を尊敬し研究する方々にとって、永く拠所となることを願っている。”と、昭和51年6月に開館、画伯自身も開館当時はまだご健在で、“私の一番好きな付知町に 記念館を造ってもらって喜んでおります。”と、あの独特の書体であいさつ文を寄せられている。

付知峡入口に位置し、木造平屋建約160㎡、ひっそりとした山国にふさわしく、味わい深い建物の外観となっている。約70点ばかりの展示作品は、画伯晩年に近いものが多く、あの初期の堅実な写実、重厚な油絵などがみられないのはしごく残念な気もする。そして表現主義的な作風から、やがて色彩・形態を単純化し、東洋風の輪郭線と大きな色面による独特な画風に



いたるまで、画伯一生涯にわたるさまざまな作風変化が一堂に集められたら……と望むのは、欲ばりなことといえよう。

いずれにしても、数々の書、それに昼の裸婦(1962)桜(1968)12支トリ(1976)など、画伯の画業の深さ、尊さは十分に身に迫ってくることは確かである。いかにも日本的な、日本でなくしては生まれ得なかった世界に誇れる熊谷芸術が、こうして三尾隆夫氏個人のお力によって、より多くの人々に公開されていることはうれしい限りである。

複製による大色紙、色紙、それに12支の絵葉書なども販売されており、それらが結構買い求められていくようだから、熊谷人気がいかに根強いかがうかがわれる。美術関係の博物館施設がきわめて少ない本県であるだけに、きらりと光り輝やく独特な存在であり、美術愛好家はもとより広く一般の方々にも訪れてもらいたい。開館時間は、午前8時30分から午後5時30分まで。月曜日休館。ただし7月1日→10月31日間は休館日なし。

中津川市苗木の「青邨記念館」とこの熊谷守一記念館を訪ねる東濃美術鑑賞の旅……はいかがですか。



各務原市歴史 民俗資料館

(保健文化会館内)

〒504 各務原市那加桜町

TEL 0588-83-1111 (代)

活動する機関への発展を!

これまで各務原市蘇原支所内に設けられていた考古資料・民俗資料室は、常時公開されておらず、何かと不便であった。今度東海中央病院が移転したのをチャンスに、病院の建物をそっくり活用、大々的に改修が行なわれ、各務原市保健文化会館としてお目見えした。交通の便に恵まれた繁華街という地の利を得て、1階には休日急病診療所・保健衛生課・伊奈波保健所分室等、2階に歴史民俗資料館、3階に図書館といったものが設けられ、他に、生涯教育センターをはじめ、高齢者学習教室・化学実験室・特別展示室・研究室・大ホール・中小会議室・卓球場・柔道場それに准看護婦学校まで収まっているといった具合で、まさに生涯教育にかかわる保健文化会館そのものである。

歴史民俗資料館は、縄文・弥生・古墳文化の包含地、岐阜県の明日香といわれる各務原市内からの出土品を中心に、すばらしく貴重な実物資料に満ちており、それはそれなりに興味深いものである。いつでも、だれでもが見学できるように、常時公開されるようになったこと自体がすばらしい。しかし、これだけの建物の中に、図書館あり学習室あり、そして研究室あり、そのうえ市史編さん室あり……といった社会教育施設を併設していることを思うと、この資料館



がそれ等と有機的に結びついて教育機能をはたしていないのが悔やまれてならない。

土器など、たしかにすばらしい資料が並んでいる。縄文時代・弥生時代・古墳時代等々と、時代区分によって陳列されており、考古学の研究者やそれに関心の深い人にとっては、興味深い資料館とはいえ、そこには人間の生活の生々しさや物語性がみられず、考古学に全く素人の一般大衆にどれだけ語りかけにくいこむか……といった教育的展示に欠けるのが残念。これだけの資料と施設がありながら、それを市民大衆の生涯学習の素材として生かしていくか……つまり博物館学的な運営がなされたなら、全国にも例をみないすばらしい考古学博物館になり得るのだが……

それには、まず専従の職員をこそ確保すること、しかもそれにはただの行政職員だけでなく博物館学と考古・歴史の専門家といったスタッフを整え、調査研究活動に裏付けされた博物館教育事業がなされるべきである。持てる宝物を十分に活用し、陳列場から一日も早く脱皮して、文化会館にふさわしい機能する活動体への発展が望まれる。開館9時～5時、月曜休館、祭日休館、入館無料。



信長公から拝領したものか……

飛騨民族考古館長 坂本重次郎

根拠となる資料はないが、その昔から相当な家柄で、冬城（桜洞城）の御典医と伝えられ、大正時代にも町医者をしており、今は子孫も絶えて何も残っていない。…との話でした。私はそのことを頼りに、関係役場や神社・仏閣等を廻り、その真相をさぐる事にほん走りました。しかし、何の資料・文献もみつからず、確たることが得られませんでした。私は、この唯一の言伝えを重要視し、信じることよりなすすべもなく、これらに深いかかわりをもった三木氏の概伝をひも解くことにしました。

三木氏は、初代である正頼が、南北朝時代に、北朝（足利幕府）に従属する守護職京極氏の代官として竹原（現下呂町）に派遣されたのが始まりで、京極氏の衰退とともに、その所領である竹原郷を押領したわけです。次第にその所領を拡大しつつ、三木氏三代目重頼の時、上村（現萩原町地内）に居館を構え、益田郡の大部分を押領し、その後四代目直頼の時（天文年代）室町末期に拠点を桜洞に移し築城せしめ、以後五代良頼・六代自綱・七代信綱と四代に亘る居城となりました。この三木氏七代の内、六代自綱（永祿年間）の時代が、その勢力も飛騨三郡中益田郡をはじめ大野・吉城郡にまで及び拡大化が強力に行なわれ、その暴威は国中に及んだと伝えられ、一族中最も武略智略ともに傑出した持ち主であったことがうかがわれます。そのひとつに、自綱は南北朝代南朝に属した飛騨北部（現古川町）に在す国司姉小路家を平然と名乗り、自ら姉小路大納言と称しています。そこには、すでに飛騨一国の主たる意識を持ち、傘下に加わらぬ一部豪族（北部江馬氏等）や、近隣諸武将への威圧的效果をねらっており、他国よりの侵入を防ぐ為だと、私には思われ、名將ぶりがうかがわれてならない。

近隣美濃においては、天下統一期を迎える織田信長、信濃にあっては武田信玄、越中には上杉謙信など史上錚々たる部将を控え、並々ならぬ苦略が多々あったと考えられます。そして、自綱は信長公とかかわりをもっていきます。信長公記等文献中に、そのかかわりを知るべく重要な条項があり、一早く天下の形成を知り飛騨の安全性を図ろうとしたものでしょうか、信長公との親交を現わす条がみられます。天正元年中甲斐信玄の死後、その子勝頼に寝返った郡上城主遠藤氏を討ち、天正三年信長公上洛の折、その恩賞としたものの中將位に任ぜられています。同年中再上洛し、「飛騨産の駿足なる栗毛の馬を献じ、信長公これを珍重する。」とあり、さらに天正四年正月、安土城築城の折再度上洛謁見しており、度重なる信長公との親交のようすが見受けられます。天正十年、信長公本能寺の変を境に、自綱は秀吉に対抗し越前の佐々成政等と共謀反旗を翻し、そのため秀吉の部将たる越前大野城主金森長近父子により攻め滅ぼされ、自綱は一説には美濃あるいは京都へ敗走したと伝えられています。主を失った桜洞城は、金森の手に移り、飛騨一国は金森統一期に移っていきます。

私は、これら三木氏興亡の概略を考え、信長公と自綱との親交を思うにつけ、この瑠璃壺は信長公より拝領されたもの、それが天正十三年に及んで、自綱はその拝下（あるいは一族）たる御典医に与え、それ以降三木氏土着説にて、今日まで隠しもたらされたものと考えたわけです。飛騨は地形も険悪な険しい山間で、戦国軍乱の世に、他国人より持ちこまれたとは考えられないし、諸国との安易な交流も皆無だと考えても誤りではないであろう。

（つづく）

博物館だより

糸魚川 淳二 著 共立出版 1,200円

ヨーロッパの博物館が一目で！

著者糸魚川淳二氏は、先に本協会が行なった学芸技術員講習会で、講師をお願いした地史学・古生態学の学者で、すでにご存知の方も多いことだろう。イギリス滞在1年間に、約180館の博物館を見て歩かれたというのだから、月平均にして10館余、これはまさしくよくもまあ一の驚きである。

本書はその題名のごとく、糸魚川氏のヨーロッパ博物館見学だより……で、第二章では、ヨーロッパ各国から36館が選ばれて、印象やら建物・展示品・収蔵資料の特色、活動のようすなどがスケッチ風に紹介されている。これらは、「科学の実験」に連載されたものを軸に書き直されたものである。第4章では、氏が見学された140館のアウトラインが、1館3～4行のメモ書き程度で紹介されている。第2章、第3章は、これからヨーロッパ旅行に出かけるような人々にとっては、事前に博物館めぐりの計画を立てる場合、大いに役立つ資料である。

しかし、この書は、“ヨーロッパの博物館見学だより”ではなくて、やはり「博物館だより」なのである。博物館づくりに深くかかわりをもってこられた、糸魚川氏自身の、これは博物館人としての、博物館からの便りなのである。

動いている博物館をつくった！

第1章「博物館をつくる」は、瑞浪市化石博物館ができるまでを体験的に綴ったもの、準備室時代に「専門の博物館であること」「地域の博物館であること」「開放された博物館であること」の三つの柱を確立され、今みごとに「小さいけれど、動いている」博物館として結実していることがうかがわれる。わずか21ページに、あっさりコンパクトにまとめられすぎているのが残念。この章の内容だけでも一冊の単行

本になるほど、もっとじっくりと、博物館ができるまでを語って欲しいというのは無理な注文だろうか。

そして、やはり読ませるのは、第8章「博物館を考える」である。ここも、わずか19ページという短編で、もっともっと聞かせて欲しいと思うばかりである。

まず博物館人づくりから……

まず博物館人づくりから……

ヨーロッパ各国の博物館の性格やその活動が、氏の考えをおりまぜて語られ、博物館の原点、日本の姿、活きている博物館像が語られている。地史学の専門家として、そして其の博物館の理解者でもあり、かつまた実際に博物館づくりにタッチされ、ペラボウな数の博物館めぐりをされている糸魚川氏、その体験にもとづく発言は、どれも鋭くズッシリとした博物館学理念である。“「展示は博物館の顔である」とよくいわれる。それは美しいほど、皆に興味をもたれるだろう。しかし同時に、すばらしい頭脳(研究)美しい声(普及・教育)たくましい肉体(収集)も必要ではないだろうか。”……これだけのことが云える博物館人が、いままでにいだろうか。

氏は、今後の課題として、“博物館は「人」と「もの」でできる。「人」をつくること、「もの」を集めることは、急にしようと思ってでもできることではない。しかし、最終的にはこの二つがきめてである。「人」をつくることから始め、「もの」は時間をかけて蓄積してゆくより他あるまい。”と述べておられる。

今すぐにでも、1章と、3章をふくらませた糸魚川博物館学の実践と理論の“また新しい「たより」を書きあげてほしい”ものである。とりわけ自然史系博物館が立ち遅れている日本であるだけに、博物館人の心の底からの叫び声として。(S.O)

これからの展示建築

美術館・博物館
資料館・記念館

展示建築研究会刊 400円

本書は、建築設計家の立場からの視点によってまとめられた出版物で、まず最初に「展示建築の現状と将来への課題」が文化庁鷲塚泰光氏によって述べられている。次に、「建築計画のポイント」「設計の基本とそのディテール」と続き、写真、平面詳細図によって、固定展示壁面・可動展示壁面・自然採光・人工照明・展示ケース・収蔵庫・収蔵棚・搬入荷解・防盜防災等の実際例が21ほど紹介されている。さらに「ケース・スタディ」として、七例の展示建築が選ばれ、実際に訪問したうえで具体的な検討がなされ、多くの指摘がなされている。最後に、展示建築データシートとして、東京近郊の15

館の内容がまとめられている。

以上いずれも、これから博物館づくりをする人々に役立つ内容だけではなく、実際博物館に務めているものにとっても、得るところ大なる文献である。わずかではありますが残部があり、実費400円で入手できるとのことです。

申し込み先は、

〒171 東京都豊島区南池袋2-26-12

光映ビル内 展示建築研究会 へ。

なお、同会では、増改築・間仕切にいたるまで、どんな些細な問題でも、展示関係建築について相談ののってくれるとのことですので付記しておきます。(事務局)

岐博協博物館学セミナー

岐阜県博物館研修室にて開催



去る1月21日、30名を越える参加者をえて開催されました。最初に、岐阜県博物館で行なわれた特別展「濃飛の甲冑」の展示内容が、ビデオテープによる記録で紹介され、引続いて、岐阜県博物館学芸員堀部満氏が、特別展開催の意義・資料調査の概要、県下に残されている甲冑について話題提供をし、その後熱心な質疑応答がなされ、予定時間を越えた勉強会となりました。今後とも、こうした郷土資料にかかわる公開された勉強会が、県博を会場にすることはもとより、各領域にわたり各方面で開催されることが望まれます。

≡ 県内 ニュース ≡

明方村博物館の山村生産用具 国の重要有形民俗文化財に指定!

今回指定されたのは、「焼き畑農耕用具」「一般農耕用具」「山樵用具」「養蚕用具」「畜産用具」「染織用具」「手仕事用具」「諸職用具」「狩猟・漁狩用具」「運搬用具」「仕事着」「飲食・灯火」「信仰用具」の13種に分類整理された山村生産用具2,037点で、木挽、炭焼き、染織関係のものが量的には多い。国の重文指定にこぎつけるまでには、資料整理、とりわけ、ひとつひとつの用具のスケッチ、測定、資料歴の記録など、たいへんな資料カードづくりがなされた。金子貞二館長は、いつ郡上踊りが行なわれているのかも気づかずじまい、村民の協力、村役場の理解と全面的なバックアップ、村をあげての事業であっただけに、指定決定の喜びはひとしおであろう。文化庁では、書類整備に、二～三年はかかるだろうとのこと、それをわずか6ヶ月でやりとげられた偉業にはただ頭がさがるば

かり、明方に金子先生あり、「博物館は、まさにそこにいる人である。」ことを見せつけてくれました。

岩村町立民俗資料館 4月にオープン

中根利助氏（商工会会長）が、上矢作町木の実にあった自分の生家、明治初年建築のもので、貴重な文化財である民家を町に寄付、これを岩村城跡にある郷土館の隣に移築したもの。木造平屋建 168.87㎡、クギを使わないで縄でしぼった建築法、中に民具・民俗資料を展示して、町立民俗資料館として完成させたものです。

美濃加茂市立図書館に 郷土資料コーナー

産業文化会館の西隣に三階建の図書館が完成。一階は270㎡の駐車場、文化会館とは2階が廊下で通じている。3階が閲覧室、これを機会に2階廊下に郷土資料コーナーが設けられた。同市名誉市民第1号、「日本の上代史の研究」で有名な津田左右吉博士や、明治の文豪塚内逍遙らの遺品が並べられ、その偉業が伝えられます。

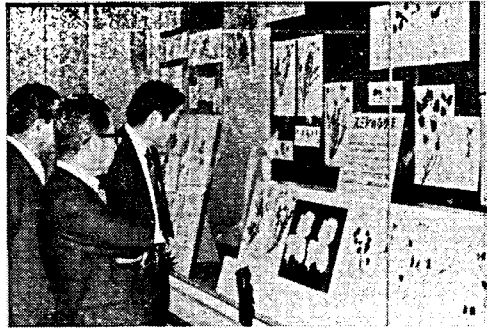
岐阜県博物館報第1号発刊

開館三年目を迎えた岐阜県博物館では、館報第1号を発行、「開館までの沿革」「管理運営の概要」「事業概要」として、◎常設展 ◎開館記念展 ◎特別展 ◎資料紹介 ◎資料状況 ◎教育普及活動 ◎日記抄、「調査研究報告」として、◎美濃・飛騨の甲冑 ◎関市倉知産材化石と関市付近の第四系 ◎博物館学習をとり入れた学校での自然保護教育 ◎展示見学の手引き「ここをじっくり」の実践 ◎植物分布報告がおさめられている。

岐阜県博物館 資料紹介 「植物の世界」開催

3月1日から1ヶ月間、収蔵資料の腊葉標本

を使って、身近な植物への関心の高まりをねらいとして、資料紹介「植物の世界」を開催。雑草とは、人里植物とは、山・野草とは、帰化植物とはが紹介され、植物図鑑に強くなろう、四季の草花のコーナーが設けられた。展示標本200種。



高山陣屋 「飛騨一日一話」を発刊

高山陣屋では、明治維新を知る重要史料「竹決寛三御用案文控」の発刊に次いで、史料第二号として郷土史誌「飛騨一日一話」を発刊、これは同陣屋囑託の八野忠次郎氏が執筆編集されたもので、「古代から金森氏入国まで」「金森藩政時代」「天領時代」「飛騨・高山時代」「筑摩県以後」の五部構成で360話で紹介されている。A五判350ページ、厚表紙・装丁カバー四色カラーで定価1,200円 予約は 高山市八軒町1高山陣屋で受付けています。

小栗氏 県芸術文化特別奨励賞受賞

本誌 42で紹介した美濃歌舞伎博物館の小栗克介氏は、今回岐阜県芸術文化特別奨励賞を受賞されました。美濃歌舞伎復活、芝居小屋「相生座」の復元、舞台衣装の管理保存、郷土芸能館・美濃歌舞伎博物館の運営などの功績に対する受賞です。今後の増々のご発展をお祈りしつつ、およろこび申し上げます。

おじいさんやおばあさんから聞いた話第一集
 巢南町立南小学校が発行

同校の4.5.6年生が、となり近所のおじいさんおばあさんに聞いた話をまとめたもので、加茂神社、左目のおじぞう様・恵方棚・ほうき星・むかしの記録・横屋の不動明王など、どれも資料的に興味つきないものばかりである。この不動尊にまつわる古文書二編が、9ページにわたって載せられており、これは専門家にも役立つ貴重な資料となっている。ご希望の方には、送料こみ実費200円(出血サービスとのこと)でおわけ下さるとのこと。切手でも可。

▽ 501-03 本巢郡巢南町古橋南小学校
 宮崎 惇まで

岐博協総会 5月20日の予定

くわしい案内は、正式決定後なされますが、5月20日(日)市町村会館を予定しています。

各会員におかれましては、ぜひご出席下さるよう、今から予定を立てておいて下さい。

53年度会費を納入下さい

昭和58年度の会費の集まり具合が、約半分ほどです。事務局の処理上大変ですので、大至急納入下さい。公立館園3,000円、私立館園2,500円、個人会員2,000円 振替名古屋70106です。

編集後記

★発行が遅くなりがちですが、新しい年度を迎え、いっそうの質的な高まりをめざし頑張っています。ご意見・ご要望など、どんどんお寄せ下さい。

★そろそろ要覧の改訂版を…の声が出ています。各館園でも、建物全景、展示室、展示品…等の白黒写真を、今からポツポツ準備しておいて下さるといいのですが…。(S.O)

中国5000年の歴史……故宮博物館を訪ねる!

台湾の旅のご案内

主催：岐阜県文化財保護協会・岐阜県博物館協会
 東海古城研究会・円空顕彰会

旅行費用 1人 99,000円
 募集人員 4-5名 又7日 5月30日
 申込み先 〒500 岐阜市司町 総合庁舎内
 岐阜県文化財保護協会事務局まで
 (詳細、問合せ等は、上記まで)

スケジュール表
 7月4日 午前 名古屋空港発
 午後 台北市内見学(給水府・青山宮
 慈恩寺・孔子廟 台北) 台北泊
 5日 バスで観光 故宮博物館見学 台北泊
 6日 台北市北郊観光 台北泊
 7日 午後 台北港 名古屋空港帰着

企画：名鉄観光
 オースKK

ALL NIPPON WAYS

とて安価で、手ごろな3泊4日の旅、……博物館見学にじゅう時間をとります。この機会に、ひいては多くの方が参加されますよう、ご案内します。